日本映画学校 第25回 卒業制作上映会

日本映画学校ファイナル!!

2013.3.2 SAT – 3.3 SUN

会場：スペースFS汐留

日本映画学校

目次

03 日本映画学校から日本映画大学へ 日本映画大学学長・佐藤忠男

04 学生達へメッセージ

06 作品紹介

15 学生コメント 卒業制作を終えて

18 協力 卒業制作にご協力いただきまして、誠にありがとうございました

20 日本映画学校の沿革／足跡

タイムスケジュール

3.2 SAT

11:00 CHAOS*LOUNGE declaration

12:00 関の里 ～子どもたちのこれから～

13:00 青春懺悔行

14:00 漁火

15:00 チューインガムをかみながら

16:15 沈みゆく街

17:10 グッバイ・マーザー

18:05 僕らの交響詩

3.3 SUN

12:30 チューインガムをかみながら

13:45 深奥のまなざし

14:35 跡と後

15:25 キネマボーイズ

16:15 僕らの交響詩

17:20 グッバイ・マーザー

18:15 沈みゆく街

日本映画学校から
日本映画大学へ

多くの優秀な人材を日本映画の製作、配給、興行その他の現場に卒業生として送り出してきた日本映画学校は、二年前から始まった日本映画大学に変身するために、専門学校としては今年でとりあえず終りになる。学校の名前が変って一年余計に在学することになるだけで、今村昌平が作ったこの学校の実習重視の教育の在り方に変わりはないのだから、敢えて区別を設ける必要もないのであるけれども、とりあえず名前も組織の在り方も変わるので、今回の卒業制作発表会は、日本映画学校の最後の作品発表会ということになる。

思えばこの学校の卒業制作発表会も輝かしい伝統を築いてきたものである。今や日本映画で最も注目されている監督のひとりである李相日の『青～chong～』が発表されたのもこの発表会だった。この作品はその後、映画館でも公開され、プロとして活躍するチャンスもすぐに得られたので、実習作品であることを超えて彼の監督デビュー作となったと言っていい。今、ドキュメンタリーの分野で次々と野心的、実験的な作品を出して評判になっている松江哲明もそうだ。彼の卒業制作だった『あんにょんキムチ』は、文化庁の優秀映画賞を受けただけでなく、今でも、セルフ·ドキュメンタリーという方法が論じられるときには、必ずそのやり方を開発した作品の一つとして引きあいに出されるようになっている。つまり今や映画史上の名作になっているのである。学生の実習映画だからといって軽んじてはいけない。

一昨年、ソウルに日本映画大学の一年生たちと一緒に行ったとき、韓国人の卒業生たちが四十人程も集って歓迎会を開いてくれた。以前、学校の創立者の今村昌平監督と釜山国際映画祭に行ったとき、多くの卒業生に出会って、今村さんは「韓国で同窓会をやれるなぁ」とご機嫌だった。日本の映画界だけでなく、いまや快調そのものの韓国映画界をはじめ多くの国々の映画人たちも育成したのだ。その力は当然、日本映画大学に受け継がれなければならない。将来、なにかの賞など得たとき「日本映画学校（現日本映画大学）卒業」と紹介されることになる諸君の健闘を期待する。

日本映画大学学長 佐藤忠男

『旅立つ日に』

ついに荒海へ船出する日がきた。
期待で嬉しくもあり、不安でもある諸君にことばを贈る。
我が校の門を叩いて３年余の諸君だが、私の場合は２０年余にわたって日本映画学校の教育現場にとりくんできて、今年で袂別の日を迎える。
振り返ると、卒業作品のなかで直接ゼミ担任をした『青～chong～』と『Voy!～ある選手たちの戦い～』は印象深い。２つともチームワークの力が素晴らしかった。『青～chong～』の場合はゼミ全員が企画に賛同し、制作経費をゆずり合った。『Voy!』の場合もブラインドサッカーという社会に意義ある題材にゼミ仲間と市民たちも献身的に協力し続けた。
お陰で『Voy!』は映文連２０１２年の優秀賞に輝いたし、『青～chong～』のデビューで李相日監督は見事に映業界の寵児となっている。
同じように卒業生の多くは、その斬新な企画力と次世代を先取りした優れた技師によって社会の中で居場所を獲得している。
「私たちの幸せは、つねに未来の社会に必要とされる存在である事です」
私が取材した生前のマザーテレサの名言である。
私自身も精一杯その生き方をつらぬきたい。これを旅立つ諸君に贈ることばとしたい。

日本映画学校校長　**千葉茂樹**

『青～chong～』(1999)
ぴあフィルムフェスティバルＰＦＦアワード２０００でグランプリを受賞した日本映画学校卒業制作作品。映画監督･李相日のデビュー作として知られる。

『Voy! ～ある選手たちの戦い～』(2012)
アイマスクと鈴の音の鳴るボールを使用するスポーツ、ブラインドサッカーの日本代表選手を追った昨年度の映像ジャーナルコース卒業制作作品。

はなむけ。25期生へ。

思い出してほしい。３年前の入学式の時の気持ちを。２年前専門コースに分かれ初めて担任講師や仲間と出会った日のことを。七転八倒しながら卒業制作を何とか作り終え、もうすぐいやでも社会へ出て行かねばならぬ君たちの心にある今の想いは何だろう。おそらく「こんなはずじゃなかった」ではないだろうか？「映画という夢」を追い求めて日本映画学校へやってきて君たちの前に立ちはだかった「映画という現実」。それは必ずしも君たちを暖かく迎えいれなかったかもしれない。いつだって現実は厳しい。うまくいかない。しかし映画作りと人生は「こんなはずじゃなかった」の連続なのだ。そんな時、初心忘れるなとは言わないけど時々思い出すといい。始まったことは終わるし、終わりは始まりだ。映画学校は終わるけど君たちの人生は終わらない。卒業おめでとう。おきてしまったこと、おこしてしまったことから学んでいける人になってほしいと切に願います。また会おうぜ。

映像科学年主任
演出技術コース合同Ａ班制作統括　**緒方　明**

卒制を終えて

人にどう見えるのかを意識して、映画作りに挑んでくれただろうか。その映画を見るであろう人の、喜び悲しみ怒り驚きの顔を忘れてはいなかったろうか。
心構えと辞書で引く。物事に対処する気持ちの準備。覚悟。とある。では覚悟は、予想される良くない事態や結果に対し、それをそのまま受けとめようと心に決めること。観念すること。とある。観念するとはあきらめることだ。
人に楽しんでもらうには、時に何かをあきらめ身軽になることも大事だ。柔軟であれ。

映画演出コース担任
演出技術コース合同B班制作統括　**サトウトシキ**

フイルム編集とデジタル編集

フイルム編集から、デジタル編集に移行すると、ある現象が起きる。
準備が非常に便利で、楽に編集ができる。が、後に残るのが、デジタルボケだ！ このボケ防止に、フイルムでの作業が、意外な特効薬、リハビリの役割を果たしてきた。
整理整頓、職人的技術。特に、忘れモノやミス、勘違いを無くす確認作業の訓練。
フイルムが無くなってしまったら、これからの映画編集での、精神面の指導が大変難しくなるなぁ…と、思うこの頃だ。

映像編集コース担任
技術三科合同B班制作統括　**境　誠一**

スクリーンで見えるもの

君たちが撮影した映像がはじめてスクリーンに映し出されたときのことを覚えているだろうか？ 16mmフィルムを見て「こんなに小さいの？」と驚きながら天に向かってコマを掲げてみる。何やら映っているようだ。映写機でスクリーンに投影してみる。そこには級友のたどたどしい芝居が、ガクガクのカメラワークが、マイクの竿が映っている。自分たちがはじめて撮った「映画」である。スクリーンは正直でごまかせない。そこに映し出されるのは常に自分達である。

演出技術コース合同C班制作統括　**熊澤誓人**

失敗、ミスのバトン

必ず失敗やミスはついてくる。もう逃れようもない。生きている限りついてくる。問題はその「失敗」をどう受け止め、どう感じ、どうストックしていくかだと思っている。
私の仕事は、私が持っている膨大な「失敗」の数々のバトンをどう伝えていくか、なのかも知れない。うまくバトンを渡せたかな？
さて僕は誰からバトンを受け取ったのだろうか？ あまりにバトンを大きく育ててしまい、もう思い出せなくなっている。

音響クリエイターコース担任
技術三科合同C班制作統括　**荒畑　洋**

ホントに撮れたの？

この度２５期生の３年間の成果として、さまざまな作品が上映されますが、撮影ゼミ生は、もう一度ここで自作と向き合い、自分の撮影や照明の意図を作品に反映し「撮った」のか、それともただ「写ってしまった」のかを反芻して欲しい。フィルムでもデジタルでもキャメラにケーブルをつなぎ、ボタンを押せば、なにかは「写り」ます。ほんとうにドラマを理解し、自分の美意識を訴え、キャメラを回し、「撮った」といえるのかどうか？ その点をしっかり自問自答して、本校を卒業して欲しいのです。

撮影照明コース担任
技術三科合同A班制作統括　**石渡　均**

すべてこれから

映画は、準備して撮影して仕上げをして、そして観客の心に届けて初めて映画として完成する。これはいつもゼミで言ってきた通り。
その意味で君たちの映画は、きょう初めて「完成」するわけだ。
完成の先には手厳しい批評が待っているだろう。
その批評に耳を傾けろ。
甘いことを言うやつには気をつけろ。
君たちがこの間の失敗や成功の体験をどう考え、その体験をどう「経験化」できるかに君たちの今後が掛かっている。言ってる意味がわかるかな？

脚本演出コース担任
脚本技術コース合同制作統括　**渡辺千明**

監督コメント

何かによって<故郷が消える>ということは、これまで以上に身近な問題となってしまいました。
人や家、思い出すらも消えてしまう。
それでも今、生活していかなくてはならない、進んでいかなくてはならない。
「悲しいけれど生きていく」これを1つのテーマとして臨んでいきました。
生きていくということの哀愁と意志をこの映画から感じて頂ければ幸いです。

脚本・監督 関祐太朗

演出技術コース合同A班

沈みゆく街

[ドラマ / 16mm / 33min]

ダム開発によって沈む街、八津原町。不用品回収で生計を立てる男と、スナックを営む母。離れていく友人。母親のかつての愛人。そして、ダム問題――日常が、少しずつ歪み始める。

<キャスト>

タモト清嵐
横山美智代
三原康可
外間　旭
リーマン・F・近藤
ナカヤマミチコ
新島勝夫
鎌滝秋浩
西川太清
米元信太郎
西原信裕
田島ゆみか
朝コータロー
増沢　望

<アドバイザー>

制作統括　緒方　明
撮影照明　石渡　均
録音　荒畑　洋
編集　境　誠一

<学生スタッフ>

脚本・監督　関祐太朗
プロデューサー　田中博巳
撮影　後藤あゆみ
照明　髙井田充
録音　河野瑠璃
編集　青島秀晃
記録　荘原正樹
美術　岩井健恭
助監督　村上俊輔
撮影助手　髙瀬大輔
髙木陽平
飯田　愛
照明助手　髙橋優太
大津　渉
安永　翔
録音助手　石田憲吾
田村麻里子
朴　厚相
編集部　坂本有里
古川達馬
荘原正樹
藏元希圭
美術助手　長﨑豊晴
演出助手　三宅海斗
メイク　藏元希圭
角田麻美
制作担当　石川美樹
制作進行　田辺侑一
キャスティング　角田麻美

監督コメント

この映画は、めちゃくちゃやなぁと思います。
主人公の純はよく「意味、わからん」と言います。
人の頭の中って、一秒、一瞬ごとに考えてることちがうくて、複雑ですよね。
やけど頭はいっこしかないから、あほみたいにややこしいことも、
実はシンプルなんかもしれません。
変な人たちばっかりでてくる映画です。
でもたぶん、どっかにおる人らばっかりです。
そういう人たちがおることを、ちゃんと知っていてあげることが、
愛って言うんちゃうかと思ってます。

脚本・監督 福田桃子

演出技術コース合同B班

グッバイ・マーザー

[ドラマ / 16mm / 33min]

大阪。都市部から離れた郊外の地方都市。一見すると人情にあふれた小さな町。“母を失った”17歳の少女。“母”の面影を求め、町をさまよう。母へなることへの不安と危うさを描く――。

＜キャスト＞

村上穂乃佳
佐藤貢三
田辺季正
清水大樹
臼井千晶
正木佐和
エミール
栞那
桑田健司
伊藤康隆
荒原英子
今村左悶
鈴木卓爾
西村喜代子
宮田早苗

＜アドバイザー＞

制作統括　サトウトシキ
撮影照明　石渡　均
録音　荒畑　洋
編集　境　誠一

＜学生スタッフ＞

脚本・監督　福田桃子
プロデューサー　神作裕司
助監督　新村隆明
制作担当　伊藤和馬
制作進行　新甫慎太郎
長尾　元
張　敏哲
撮影　髙橋草太
照明　宮川鉄平
録音　徳永芽依
記録　稲生太郎
演出助手　遠藤祐輝
武井沙也佳
キャスティング　木村紫織
美術　横田瑠衣
撮影助手　山田桃子
川端健太
岡田雄太
照明助手　松田瑞穂
加藤　育
録音助手　細井裕太
川尻春菜
小貫裕平
庄司寿之
編集　谷川詩織
岡本健太
紺野千咲子
出川　天

監督コメント

彼らは本当に不器用で純粋です。
対立する優と紗香に、歯車が噛み合わない部活動に、あなたはもどかしさを感じるかもしれません。
「何のために吹奏楽をするのか」理由なんて人それぞれいっぱいあると思います。
それでも集団で一つの事を成そうとする彼らはどう答えを出すのか。
青春と言われるあの時期だからこそ生まれる感情を、少しでも感じて頂けたらと思います。

脚本・監督 倉科慎太郎

演出技術コース合同C班

僕らの交響詩

[ドラマ / 16mm / 33min]

吹奏楽部の仲村優は、転校生・三井紗香とのトランペット対決に敗れ、メロフォンという楽器を吹くことになる。慣れない楽器に悪戦苦闘する優。一方、部内では紗香と部員たちの間に軋轢が生じ…。

＜キャスト＞

鈴木一希
中村優里
村上雄太
小倉史織
藤澤　慧
中田寛美
生駒朱里
岩崎友紀
金本愛希
北澤理恵
國仲菜摘
上妻裕香
篠塚祐伴
富山広美
橋川　信
松岡ありさ
森　瞭平

＜アドバイザー＞

制作統括　熊澤誓人
撮影照明　石渡　均
録音　荒畑　洋
編集　境　誠一

＜学生スタッフ＞

脚本・監督　倉科慎太郎
プロデューサー　井上純平
副プロデューサー　小松慎平
制作　水野寛之
佐山拓弥
演出部　添田有貴
伊東裕輔
前原次朗
美術部　村上健太
崔　花郎
衣裳部　吉田有希
音楽担当　日出嶋伸哉
撮影部　三輪亮達
髙橋史弥
鈴木佳奈絵
友利水貴
照明部　梶本康平
井筒勇太
川上　翼
チョヒン
録音部　松田友希
萩野洋平
野島春枝
岡部雄祐
小湊和也
記録　小池慎一郎
編集部　鍛治　葵
生駒朱里
川村紫織
竹内亨織
渡邉千波

監督コメント

私たちは年を重ねていくと、少なからず妥協が多くなったり現実との駆け引きを上手くやっていったりするのが当たり前になっていってしまうと思います。
子供の時は何も怖いものなしで何でも挑戦できてしまう。
純粋で残酷でキラキラしている。
私もチューインガムを噛みながら生意気な子供でいようと思います。

脚本・監督 近藤紫乃

脚本技術コース合同

チューインガムをかみながら

[ドラマ / Blu-ray / 40min]

「私は、一人でも生きていける」 震災から半年、自分本位な大人達に嫌気が差した佳乃子（12）は家を出る。街を流れ歩く少女が出会う一様ではない大人達。少女が最後に見たものとは…。

＜キャスト＞

一柳光紀
大島葉子
小野孝弘
佐竹遙人
大方斐紗子
香取　剛
野口雅弘
里村孝雄
鈴木正子
竹中　彰

＜アドバイザー＞

制作統括　渡辺千明
　　河本瑞貴
　　栃原廣昭
撮影照明　石渡　均
録音　荒畑　洋
編集　境　誠一

＜学生スタッフ＞

脚本・監督　近藤紫乃
プロデューサー　藤増哲平
制作　竹中　彰
助監督　初見弘貴
　　和久田耀平
撮影　加藤　育
　　髙橋史弥
　　飯田　愛
　　川端健太
照明　三輪亮達
　　後藤あゆみ
　　髙橋草太
　　松田瑞穂
　　山田桃子
録音　庄司寿之
　　打木謙一郎
　　小湊和也
　　パクフサン
編集　片岡葉寿紀
　　岡本健太
　　古川達馬
　　渡邉千波
　　金栗広典
記録　片岡葉寿紀
美術　小村直樹
　　四宮龍之介
衣装・メイク　藏元希圭

監督コメント

汗が頬を伝う。学生ではありますが、プロの教えを受け継ぎ、プロの精神を持って作品を創り上げました。
『本気』と『覚悟』の精神で、仲間を信じ、共に作品を創れたことは一生忘れられないでしょう。
初稿を書き上げた夏から、また一夏が経ち――目の前に広がる映像は夢のようです。皆様が作品を観終わって「明日は、少し頑張ってみようかな」っと想って頂けたら、この上ない幸せです。

監督 友利水貴

技術三科合同A班

深奥のまなざし

[ドラマ / 16mm / 30min]

十五歳の夏。児童養護施設で暮らす浩一は、父親の命日の翌日に施設を飛び出す。「クワガタは思った。なぜ思いのまま、翅を伸ばすことができないのだろう…」山奥で浩一が見たものとは。

＜キャスト＞

石田愛希
三浦知之
薫
下江昌也
阿久津秀寿
田中孝治

＜アドバイザー＞

制作統括　石渡　均
撮影照明　石渡　均
録音　荒畑　洋
編集　境　誠一

＜学生スタッフ＞

監督　友利水貴
脚本　友利水貴
髙瀬大輔
三輪亮達
プロデューサー　三輪亮達
副プロデューサー　後藤あゆみ
制作進行　渡邉千波
撮影　川端健太
岡田雄太
鈴木佳奈絵
照明　安永　翔
髙橋優太
録音　石田憲吾
徳永芽依
田村麻里子
小湊和也
編集　渡邉千波
藏元希圭
荘原正樹
出川　天
演出　髙瀬大輔
山田桃子
髙橋草太
美術　出川　天
衣裳･メイク　藏元希圭
記録　荘原正樹

監督コメント

この作品のテーマは、「生きる」ということです。
大雑把に「生きる」と書きましたが、人それぞれ「生きる」ということの意味は違うでしょう。
母親に受け入れてもらえない主人公ゆきにとって、日々の生活は何の抵抗も感慨もない。
毎日が退屈でしょうがない。それが彼女の生きるということ。
妻と娘を殺されてしまい、そして自らも罪を背負う者となった相模。
自分の愛する者が殺され永遠に失われたという、どこにもぶつけられない想い、悲しみ、そして復讐心。
それが彼の生きるということ。
さまざまな人間がそれぞれの時間を生きる。そこで出会う二人を描きました。
現実は甘くない。現実は変わらず母親には愛情を注いでもらえない。
妻も娘も帰ってこない。
それでも生きていく力強さや、成長を描けたらと思います。

監督 坂本友里

技術三科合同B班

跡と後

[ドラマ / 16mm / 31min]

日常生活になじめない少女·ゆきには、近所にある廃デパートだけが心安らぐ場。ある日、その廃デパートに謎の男·相模が逃げ込んで来る。そこからゆきと相模の奇妙な関係が始まったー。

＜キャスト＞

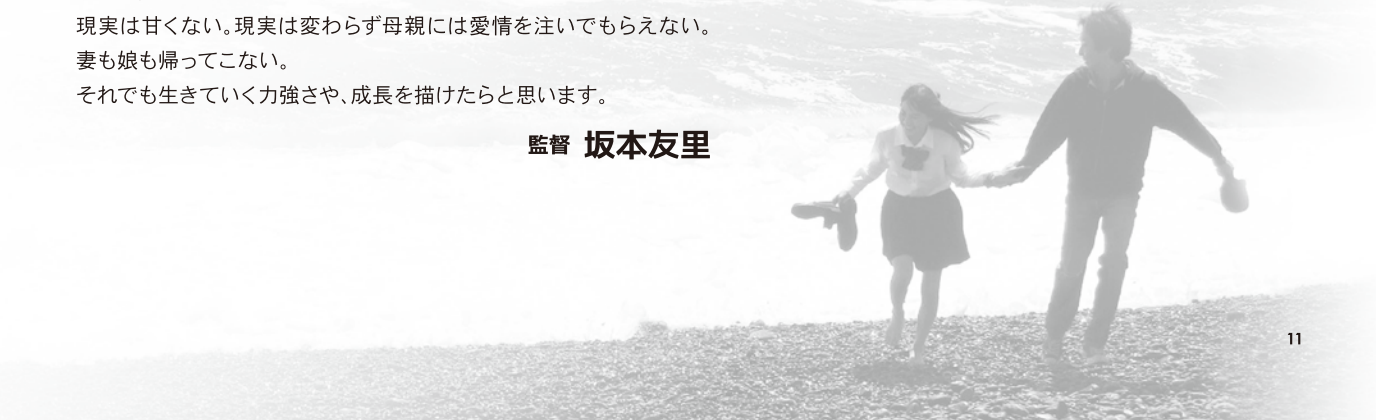
大坂美優
服部竜三郎
国保裕子
橘　季佐
古澤光徳
矢崎初音
亀山由美子
菅野秀之

＜アドバイザー＞

制作統括　境　誠一
撮影照明　石渡　均
録音　荒畑　洋
編集　境　誠一

＜学生スタッフ＞

監督　坂本有里
脚本　紺野千咲子
　坂本有里
プロデューサー　稲生太郎
　古川達馬
撮影　宮川鉄平
照明　髙井田充
録音　川尻春菜
美術　岡本健太
編集　谷川詩織
記録　鍛治　葵
助監督　竹内亨織
演出助手　生駒朱里
　片岡葉寿紀
撮影助手　髙木陽平
　大津　渉
照明助手　井筒勇太
　チョヒン
録音助手　朴　厚相
　松田友希
編集部　稲生太郎
　片岡葉寿紀
　紺野千咲子
衣裳　生駒朱里
制作　谷川詩織
　紺野千咲子



監督コメント

皆さんは、学校で友達とバカ話をして盛り上がっている時、恋人と手をつないでデートしている時、一人でポツンと信号待ちしている時、ふと我に返ったことがありませんか？
“自分はこれからどうするのだろう？”
このままいつまでもバカ話はしてられない…このままいつまでもこの子と手をつないではられない…赤信号が青に変わっても、歩足が竦んで動けなくなったことはありませんか？ 好きなこと、やりたいこと…自分の道、他人の道…何のため？ 誰のため？
目の前にある無数の道。自分はどの道か…答えを知るには進むしかない。
この誰もが一度は感じたことがあるであろうジレンマを、時にポップに、時にシリアスに、時に痛快に！！ 様々な見せ方で描いている魅力的な映画に仕上がっていると思います。
『キネマボーイズ』ぜひ、楽しんでください。

監督 萩野洋平

技術三科合同C班

キネマボーイズ

[ドラマ / 16mm / 30min]

廃止寸前の映画サークルに所属する陽太と宏昭。陽太は映画作りに没頭するが、宏昭は将来への不安を抱き始めていて――。果たして彼らが再び“キネマボーイズ”に戻る日はくるのか？

＜キャスト＞

松原佑允
住吉健太郎
今泉彩良
松井宗但
柳原純子
山本雅子
本田智宏
光木麻美
瀧沢李佳
吉田和希
渡部祐希
福富信之
上村悠輔
桐島一也
藤原　慧
インゴ･ピルチ（友情出演）
鈴木　功（友情出演）
新開咲輝（写真出演）
西川健一郎（写真出演）

＜アドバイザー＞

制作統括　荒畑　洋
撮影照明　石渡　均
録音　荒畑　洋
編集　境　誠一

＜学生スタッフ＞

監督　萩野洋平
脚本　打木謙一郎
萩野洋平
プロデューサー　庄司寿之
副プロデューサー　岡部雄祐
撮影　飯田　愛
髙橋史弥
松田瑞穂
照明　梶本康平
川上　翼
加藤　育
照明応援　髙橋優太
安永　翔
録音　山下啓助
野島春枝
細井裕太
編集　小池慎一郎
川村紫織
金栗広典
青島秀晃
助監督　河野瑠璃
打木謙一郎
小貫裕平
記録　青島秀晃
美術　小貫裕平
小池慎一郎
金栗広典
衣装メイク　川村紫織

映像ジャーナルコースＡ班

青春懺悔行

［ドキュメンタリー / HDV / 40min ］

島根から上京した勝部卓登は１０月２３日に２１歳を迎えた。母に自分が生まれた日の事を尋ねると同時に卓登には母に言えない秘密があった。家族、恋人、そして自分自身を、カメラを通し見つめていく。

＜キャスト＞

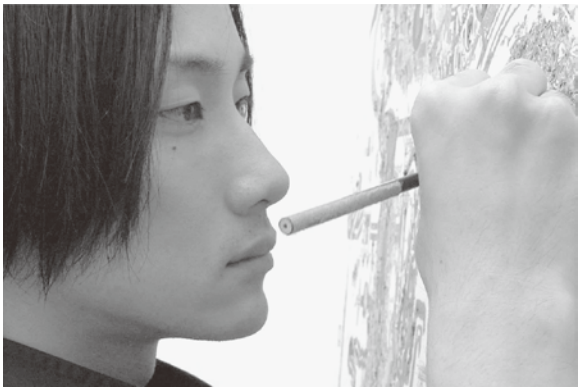
勝部卓登
勝部律子
勝部千恵子
平塚福雄
平塚末子

＜学生スタッフ＞

監督･撮影･録音　勝部卓登
編集･構成　田中　圭
制作　鈴木麻奈未

＜アドバイザー＞

制作統括　千葉茂樹
演出　島田隆一
撮影　山内大堂
編集　辻井　潔



映像ジャーナルコースＢ班

CHAOS*LOUNGE declaration

［ドキュメンタリー / HDV / 40min ］

漫画やアニメをモチーフとした作品を発表する集団「カオス*ラウンジ」アート界に一石を投じた“オタク達”の自意識の表れは、現代を映し出す。いま必要な表現とは何なのか、その可能性を探る。

＜キャスト＞

CHAOS*LOUNGE
黒瀬陽平
梅沢和木
藤城　嘘

＜学生スタッフ＞

監督･録音　梅田　駿
撮影　鷲澤健太
制作･編集　安達也称

＜アドバイザー＞

制作統括　千葉茂樹
演出　島田隆一
撮影　山内大堂
編集　辻井　潔

映像ジャーナルコースC班

関の里
～子どもたちのこれから～

［ドキュメンタリー / HDV / 40min ］

福島第一原発から約８０キロの距離にある福島県白河市。低線量被曝地域のこの土地には、出て行けない家族、出て行かない家族、故郷から出ざるを得なかった家族、様々な立場の家族が生活している。

＜キャスト＞

星　寿江　星ヒカル
星　　洋　星信乃介
渡邊敏雄　渡邊美友
渡邊萌子　渡邊寿枝
渡邊初男　渡邊ミドリ
松木清隆　松木清秀
松木アイ子
ルモイン 優子
ルモイン ジャン･ピエール
ルモイン アンナ
ルモイン マノン
研　雄二
「草津ハンセン病療養所子どもキャンプ」参加者の皆さん
草津楽泉園とみちのくの子どもをつなぐ会の皆さん
福島県白河市白河市立第一小学校の皆さん

＜学生スタッフ＞

監督　中野雄貴
撮影　前田大和
録音･音楽　宮坂太己
制作･編集　飯山未弥子

＜アドバイザー＞

制作統括　千葉茂樹
演出　島田隆一
撮影　山内大堂
編集　辻井　潔

映像ジャーナルコースD班

漁火

［ドキュメンタリー / HDV / 40min ］

みーばーは独りＴＶと同居しながら故郷を想う。娘の千里は統合失調症を患い、たまにみーばーの家に帰ってくる。つつましくも家族の風景があった。初夏、急遽みーばーは故郷へ向かうことになった。

＜キャスト＞

濱田光男
濱田千里
沢田シヅ枝
久岡道夫
石山和則

＜学生スタッフ＞

監督　沢田啓吾
撮影　豊福崇之
制作･編集･録音　吉田拓史

＜アドバイザー＞

制作統括　千葉茂樹
演出　島田隆一
撮影　山内大堂
編集　辻井　潔

学生コメント

仕上げ作業や就職活動など忙しい中、
学生２１名に「卒業制作を終えて」をテーマに
コメントをいただきました。

構成：曽根大樹 ／ 編集：芦澤浩明
写真：作石敏幸･講師の皆さま･有志の学生たち

『キネマホーイズ』某大学にて

映画は一人で作るものではない。現場には大勢の人がいて、一つに向かって動いている。周りのものを純粋に良いと思う事がどれだけ重要か、感謝する事がどれほど大切か、実習を通して改めて痛感しました。振り返れば、この３年間で何度も感じた事でしたが、忘れがちになっていました。これからも常に周りに対し、敏感にいなくては、と思います。

演出技術コース合同Ａ班
『沈みゆく街』監督　**関祐太朗**

もう学生なんて言ってられない。
人に観せるものを作るというのがいかに辛く痛々しいかを学んだ３年間でした。答えの無い多くの選択肢から、何か一つを選ばなければならない。自分達学生は知識も経験もありませんが話し合う時間だけはあります。監督をはじめ自分達が悩み抜いた３０分の作品が、誰かに届けば幸いです。

演出技術コース合同Ａ班
『沈みゆく街』プロデューサー　**田中博巳**

今までの実習とは違い、ゼロからの自由なキャスティング。色々な映像や舞台を見て、オファーした俳優さんの出演が決まった時は心底嬉しかった。
無茶な条件を快く受け入れていただき、最後まで誠実に対応してくださったキャストの皆さんと事務所の方々、本当にありがとうございました。

演出技術コース合同Ａ班
『沈みゆく街』キャスティング　**角田麻美**

日本映画学校に入学してから３年が経ちました。３年間でたくさんの人と出会い、一緒に映画を作ってきました。映画学校はとても人と人とのつながりが濃いような気がしています。１年生の頃に講師の先生が「誰と映画を撮るか、撮りたいか」が大事なことだと仰っていました。今でも心に残っている台詞です。

演出技術コース合同Ｂ班
『グッバイ･マーザー』プロデューサー　**神作裕司**

母親の影響で気がついたら映画が好きでした。
撮影を志しましたが露出の計算で挫折。しかし録音という新しい世界に出会えました。
今回初めてミキサーを担当しました。動き回る方が好きな私にとっては、神経をすり減らすような仕事でした。でも達成感があり、そんな気持ちが作品にも現れていると信じています。

演出技術コース合同Ｂ班
『グッバイ･マーザー』録音部ミキサー　**徳永芽依**

漠然と映画の仕事に就きたいと思い入学したのが３年前。橋本さん、井土さん、緒方さん、熊澤さん…と講師の方々に映画のなんたるかを学んできました。『僕らの交響詩』では監督を務めましたが、学んだ事など序ノ口で、完成してみてやっと映画の姿が見えたというような気になりました。何はともあれ観ていただくのが映画。是非、楽しんでください。

演出技術コース合同Ｃ班
『僕らの交響詩』監督　**倉科慎太郎**

2012.10.21
綱島･スクラップ場

強い日差しの中、『沈みゆく街』の撮影現場へ伺いました。主人公の職場であり作品を担う大事な舞台です。きれいに分別されつつ積み上げられた資材に囲まれ、抜群の雰囲気の中、撮影は進みました。劇用車を使用するため何度もテストを行いました。撮影場所の方より被災地の瓦礫や解体のお話を伺い、大変考えさせられました（曽根）

2012.11.02
宮ヶ瀬ダム

制作方の自分が『沈みゆく街』脚本を読んだ時、軽トラ出ずっぱりじゃねぇ～か？！ …出番を感じた。車両積載車を使用した車両撮影。安全に最新の注意を払い、ハンドルを握りしめる手の感触、微妙なアクセルワークを必要とする右足、押し寄せる緊張感、快感です。スタッフも皆、よく頑張りました。車両清水健司氏に感謝（芦澤）

『沈みゆく街』劇用車撮影

私は日本映画学校での３年間で（中略）それはまるで動物園のようでした。私はここで人生という名の（明らかなので省略）『僕らの交響詩』の物語は（長いので略）吹奏楽の歴史において（煩雑なので略）人生という名の（重複するので略）という思いで制作しました。以上のことを踏まえ、観て頂けると幸いです。

演出技術コース合同Ｃ班
『僕らの交響詩』プロデューサー **井上純平**

カメラマンを目指していても、撮影の技術だけではダメだということを思い知った。自分には撮影の技術が足りていないということも思い知った。
撮影では、監督と連日連夜話し合いを繰り返していたが、何をそんなに話す事があったのか…。
主人公の優や、紗香の気持ちを突き詰めて真剣だった。少しでも登場人物の気持ちが伝わればと思います。

演出技術コース合同Ｃ班
『僕らの交響詩』カメラマン **三輪亮達**

映画作りが大変なのは人と人が関わり合うからだと思う。そして人と人の間にあるのは言葉しかないのかなあと思う。勿論、思い考えることは大切だけど、本当に大事なのはそれを誰かに伝えること。言葉にすることは勇気がいる。自分が傷つくこともある。誰かを傷つけることもある。それでも、そこからしか何かは生まれないのかもしれない。

演出技術コース合同Ｃ班
『僕らの交響詩』チーフ助監督 **添田有貴**

脚本技術コース合同『チューイングガムをかみながら』は、日本映画大学内のプールを飾りこみ、廃工場のシーンを撮影しました。飾りこみに使用した美術は倉庫に保管されていたもので、そのほとんどが歴代の卒業制作作品で活躍した美術です。

改めて、映画の怖さを感じました。
当たり前なのですが、監督の小さく細かな選択で映画は良くも悪くもなる、その選択の重みを痛切に感じました。
３年間で学んだことは、映画はみんな仲良く作るんじゃない、と思いました。

脚本技術コース合同
『チューインガムをかみながら』
監督 **近藤紫乃**

正直、自分がチーフ助監督として正しい行動をしたと胸を張れません。
実習は逃げ出したい事ばかりです。ただ、そこで逃げる事だけは、いけない事だと感じます。何が正しいのかわからない中で、それだけは確かだと思います。単純ですが。
これから僕は卒業します。講師からいただいた言葉を思い出しながら、前に進みたいと思います。

脚本技術コース合同
『チューインガムをかみながら』
チーフ助監督 **初見弘貴**

『深奥のまなざし』はご協力を頂いた皆様の「思い」で、見事ヤマを登りきり、完成へと至りました！
私は２１歳の素人です。ただ、素人でも分かることがある！ 伝えたいことがある！ 私は日本映画学校で多くはない「道」を歩ませて下さいました。
「命を愛することが映画」だと私は思います！

技術三科合同Ａ班
『深奥のまなざし』監督 **友利水貴**

奥多摩での撮影･合宿は、不安の方が勝っていたのを思い出します。山の天候に悩まされ、民宿での撮影は時間に制限され…。
しかし苦労の多かった分、想い入れの強い作品になりました。観てくださる方々へスタッフの汗と涙が伝わるといいなと思います。

技術三科合同Ａ班
『深奥のまなざし』チーフ助監督 **高瀬大輔**

現場では上手く録音できたと思っていたが、ポスプロでは整音に苦しんだ。その結果ＳＥに手がまわらず、完成した作品は理想とは程遠いものになってしまった。
講義などは基本的にサボっていた。しかし、撮影が始まると休むことなく、朝の目覚めも良かった。この学校で学んだのは、自分が本当に映画を好きだという気持ちだと思う。

技術三科合同Ａ班
『深奥のまなざし』録音部ミキサー **石田憲吾**

技術三科合同Ａ班『深奥のまなざし』は山のシーン撮影のため、奥多摩･御岳山へ３泊４日の撮影合宿を行いました。

2012.10.25
日本映画大学

映画大学の体育館にて『僕らの交響詩』の練習シーンの撮影でした。プレイバック（現場で音楽を流しながら撮影をする方法）のため、事前の細かい打ち合わせはもちろんのこと、「次のカットは○小節目から！」などスタッフ間で声が飛び交い、緊張感と一体感のある撮影現場でした。ずらりと並んだ楽器に画力を感じました（曽根）

2012.11.08
宮前市民館

『僕らの交響詩』のラストシーンの撮影。撮影できる時間が限られているため、急ぎ足で撮影が進みます。また会場全体をロングで狙うため、舞台上の細かい配置やエキストラの方の案内など、スタッフ間のコミュニケーション能力を試されていました。最後に誕生日を迎える出演者の方へのサプライズケーキが登場し、無事撮影が終了しました（曽根）

2012.10.30-31
奥多摩･廃墟

奥多摩駅からバスで４０分ほどある山中にて『グッバイ･マーザー』は撮影をしていました。人の立ち入らない本物の廃墟のため、制作部が事前に斜面の土を削って階段を作ったそうです。廃ロープウェイのゴンドラをメインに、登場人物の揺れる心情を写していきます。冬の入口にあった山中は底冷えし、また突然の雨にみまわれたり、湖沿いの車道

今回の作品は傷メイク･日焼けメイクがあり、準備期間からとても大変でした。
３年間、どの現場を思い返しても辛いことはたくさんありました。でも、クランクアップを迎える日になるたびに、毎回“寂しいな”という気持ちになる。辛いことのなかにある一瞬の楽しいという気持ちがすごく大きいことを感じ、学びました。

技術三科合同Ａ班
『深奥のまなざし』衣装･メイク **藏元希圭**

この３年間はぶつかって逃げての繰り返しでしたが、色々な人と関わりました。嫌な思いも楽しいことも沢山ありました。でもそれは、自分のいいところや弱点を知るいい機会だったと思います。
「ブログ更新しすぎ」等々云われてきましたが、これからもこの学校で得た経験を活かしていきたいです。

技術三科合同Ｃ班
『キネマボーイズ』副プロデューサー兼
ＪＡＭＩＴＩＭＥＳブログ番長 **岡部雄祐**

もし私がこの映画の主人公なら、起こる出来事に対してどう感じるだろうか。観客は何を観たいのか、知りたいのか。この体温を、感情を伝えたい。
映画って不思議です。無から人生を作り出す事、隠された演出、語られる映像…心が動かされるから涙が、笑みがこぼれ、幸せになるのです。
３年間で大きく変化したのは私の心です。

技術三科合同Ｃ班
『キネマボーイズ』カメラマン **飯田　愛**

初めての演出部は右も左もわかりませんでした。
作品を完成させた今でも、もっと作品のために出来た事があるように感じています。
とにかく映画が好きなスタッフが集まって、お客さんに楽しんでもらいたい一心で作り上げた、そんな作品だと思います。
足掻いた跡だらけですが、楽しんで観てもらえたらと思います。

技術三科合同Ｃ班
『キネマボーイズ』チーフ助監督 **河野瑠璃**

初めての助監督は大変で脳ミソ爆発寸前でしたが、とにかく楽しかったです。スタッフ全員が全力疾走（暴走？）した作品です。
仕事であれ、趣味であれ、デートコースであれ、作る側も観る側もそれぞれいろんな思いを映画に込めている、と感じた３年間でした。

技術三科合同Ｃ班
『キネマボーイズ』
セカンド助監督 **打木謙一郎**

笑ったことも、泣いたことも、苦しいことも沢山ありました。関係作りが大切なことを、身に沁みて感じました。諦めずに粘る力が付きました。
技術より何より、精神が鍛えられた３年でした。このやる気で、この先も頑張ります。

映像ジャーナルコースＣ班
『関の里』プロデューサー･編集 **飯山未弥子**

はじめてがっつり編集をやりました。およそ１００時間以上の素材を相手にして。
最初は時間を忘れてやりました。最高のおもちゃを手にした気分でした。でもその先は…力も技も知識もないですが、頑張ってつくりました。
この学校で出会った人はみんなおもしろい人ばかりで、それが嬉しかったなぁ。

映像ジャーナルコースＤ班
『漁火』プロデューサー･編集 **吉田拓史**

映像ジャーナルコースの卒業制作作品は企画から取材交渉･撮影･仕上げまで全てを学生が担当しました。これまでに習得した知識や技術を活かし、長期間の取材を通してスクリーンに「人間」を描き出します。

JAMI TIMESとは？

今年度の卒業制作を綴ったブログです。各班の担当者による現場日記を掲載し、夏までは技術三科合同Ｃ班『キネマボーイズ』が、秋からは演出技術コース合同Ｃ班『僕らの交響詩』を中心に、ブログ番長ことオカベくんの記事を掲載しています。学生達の映画への熱意を、ぜひご覧ください。

http://jami25.blog.shinobi.jp

がすぐそばにあるため音にも気を配ったりと、思うように進まなかったように見えましたが、ロケーションの力もあってその分いい画が撮れたのではないかと思いました（曽根）

2012.12.08
日本映画大学

『チューインガムをかみながら』は映画大学の校庭とプールを利用して撮影をしました。校庭が広いため、普段ではなかなか入りづらい位置にキャメラを構えることができ、少ないスタッフながらも挑戦する姿勢が見られました。プールでは移動車を使った大胆な長回しがありますが、ベコベコとプールの底が今にも抜けそうでヒヤヒヤものでした（曽根）

「グッバイ･マーサー」ゴンドラにて

卒業制作にご協力いただきまして、誠にありがとうございました

協賛　Kodak Motion Picture Film　FUJIFILM 報映産業株式会社

協力　imagica　YOKOCINE D.I.A.

＜スペシャルサンクス＞

フイルム協賛　岩佐睦子　コダック㈱
田地秀行　報映産業㈱

現像所　横山雄志　㈱ IMAGICA
水谷真理　㈱ IMAGICA
江川太洋　ヨコシネ DIA

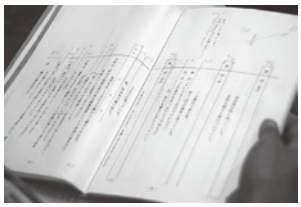
タイミング　飯野　浩　㈱ IMAGICA
倉森　武　㈱ IMAGICA
佐藤弥生　㈱ IMAGICA

光学リレコ　狩野　靖　ヨコシネ DIA

美術協力　川崎市橘ＲＣＣ

車両協力　トヨタレンタリース新百合ケ丘店
内藤謙二

協力　川崎市黒川青少年野外活動センター



『沈みゆく街』

音楽　谷井智彦
制作協力　一色莉沙　眞野嵩之
メイク協力　みやちひろし
車輌　清水健司
車両応援　西川太清
劇用車　芦澤浩明
車両協力　トヨタレンタリース神奈川
青木保彦
キャスト協力　㈱アミューズ
㈱大沢事務所
㈲ザズウ
㈲GMB プロダクション
㈲スターダス･21
㈲スタッフ･ポイント
放映新社
泉水美和子
千葉大樹
松枝佳紀
エキストラ協力　山口幸彦　川上伸一
尾崎暁登　八下田智生
平井則明　佐藤美江
関戸行雄　関戸信好
成田清美　山岸重子
貝瀬清美　柏木孝介
梅津昭吾　松尾梨奈
富田順子　長田テル子
長田義夫　長田幸二
西丸三千則　柏原義文
小林ゆかり　小林香凛
千葉　壮　三樹正美
三樹久子　三原丸子
藤本由美子　浜谷　仁
富田夏帆　藤田恵利子
池澤千鶴　岡田　愛
赤木　亨　柏木るみ子
安藤幸子　鈴木カツイ
渡辺　博　金川　勲
海老根壽　海老根ヒサ
熊耳　明　熊耳佐枝子
取材･ロケーション協力　片野不動産
スナックチェリー
有限会社三森興業
岩本興産株式会社
花鳥神社
黒田興業株式会社 川崎支店
黒茶屋
古賀河川図書館
下原自治会館
星竹神明社
三ヶ木倶楽部
山下自治会館
有限会社ヤマヨシ
八ッ場ダム あしたの会
陽谷院
財団法人日本ダム協会
相模川水系広域ダム管理事務所
大津元治　古賀邦雄　松本秀夫
吉田堅二　渡辺洋子
美術･衣装協力　アウトドアショップ ごんざれす
株式会社荒川商会
インテリア･リフォーム丸石
小田急バス 生田営業所
柿生地区会館運営委員会
鴨部電気店
金太郎
ＫＹリカー 新百合ヶ丘店
コーエイメタル株式会社
GOLDIC
佐々木ソーイング
水郭園
高橋メガネ
居酒屋 謫仙人
有限会社たぶてん
メガネの竹松
モリモト印刷株式会社
森谷商店
有限会社柳原材木店
横浜測器株式会社
川崎市橘ＲＣＣ

『グッバイ･マーザー』

音楽　今村左悶
車輌　阿部史嗣
撮影･ロケーション協力　すずらん通り商店街
スナックすみれ
町田市
西多摩建設奥多摩派出所
三ノ輪銀座商店街振興組合
川崎市立麻生中学
ホルモン焼き 屯亀
有限会社肉の冨士屋
八百権
コーヒーハウスあめみや
森正吉　森清　森政男
善生寺　正山寺
高橋　聡　関ロフサ江
橘河照夫　渕上みさお
株式会社やまふ水産
美術協力　アトリエＪ阿形
株式会社ヒロミチ
株式会社テイチクエンタテインメント
中川恵理子
車輌協力　メタルガレージ
株式会社トヨタレンタリース
キャスティング協力　㈱アルファセレクション
クレヨン
株式会社スターダストプロモーション
トヨタオフィス
ノックアウト
Breath
ラザリス
リトルモア／アズランド

『僕らの交響詩』

音楽　古田儀左ェ門
森　拓治
車輌　山中　同
劇中演奏曲　「ロンドンデリーの歌」
アイルランド民謡
編曲 古田儀左ェ門
キャスティング協力　株式会社ノックアウト
株式会社ＣＬＥＯ

放映新社
ロットスタッフ
アクション協力　ＡＴＴ
アクションコーディネーター　根本太樹
イチコ
橋本浩人
演奏協力　佐々木理絵（フルート）
中川鉄也（クラリネット）
松本安津美（クラリネット）
宮下ＢＣ隆（クラリネット）
東　涼太（アルトサックス）
若木　曜（メロフォン）
福島正紀（トランペット）
益子和子（トランペット）
北野祥吾（トロンボーン）
中野友貴（トロンボーン）
山戸宏之（ユーフォニウム）
古沢　充（チューバ）
秋田考訓（パーカッション）
橋本淳平（パーカッション）
長谷川剛士（パーカッション）
協力　井川千恵
中　隆志
坂巻美来
八王子市立ひよどり山中学校
㈱フナショー
楽器族。ブラストライブ
快楽音響
株式会社トヨタレンタリース神奈川
有限会社映像サービス
有限会社グリフィス
エキストラ協力して下さった皆様
楽器を貸して下さった皆様
ロケ地協力　町田市
神奈川県立相原高等学校
川崎市宮前市民館
彩の国本庄拠点フィルムコミッション事務局
ロケ地コーディネーター　川上芳男
埼玉県立本庄北高等学校
村上邸

『チューインガムをかみながら』

音楽　bulbs of passion
車輌　清水健司
キャスティング協力　浅野博貴
小野孝弘
株式会社 CLEO
現代制作舎
T-artist
J-beans
夢工房
ロケーション協力　飯田邸
和泉多摩川商店街
メモリアルフォレスト多摩
仲見世商店街
川崎大師公園
ヤマザキショップ新百合ヶ丘店
長原貸家
日本映画大学
美術協力　芦澤浩明　小貫裕平　長﨑豊晴
エキストラ・撮影応援　添田有貴
伊東裕輔
吉田有希
村上俊輔
井筒勇太
髙木陽平
初見純子
すすき野小学校の皆様

『深奥のまなざし』

音楽　田中敦士
ロケーション協力　児童養護施設 川崎愛児園
八丁畷商栄会
川崎市立麻生中学校
川崎市黒川青少年野外活動センター
宿坊 静山荘
石井広光
メイクアップ協力　吉森香織
動物アドバイザー　加藤裕之
機材協力　株式会社アーク・システム
協力　株式会社どうぶつむら 御岳やまめの牧場
川崎市橘リサイクルコミュニティセンター
御岳登山鉄道株式会社
市川　修
奥山弘信
焼肉 太陽
立ち呑み わさび
キャスティング協力　劇団ひまわり
㈱ＴＭコーポレーション
㈱ＳＨＲＥＷ
㈱アミューズ
千葉文香
応援　髙橋史弥　松田瑞穂
井上純平　竹中　彰
村上俊輔　山本　暖
朴　厚相
エキストラ　髙橋瑠奈
髙橋大陽
車両　清水健司

『跡と後』

音楽　田川めぐみ（東京芸術大学 大学院）
車輌　阿部史嗣
キャスト協力　Transparente
ハーヴェストプロダクション
エキストラ協力　倉成みう
佐々木裕美
國仲菜摘
村山幸介
栗木台のみなさん
日本映画大学1期生・2期生のみなさん
ロケ地協力　常総フィルムコミッション
㈱マイライフ・コーポレーション
京浜急行バス株式会社
杉並区立大宮中学校
平和小路のみなさん
でんきのあきもと

『キネマボーイズ』

音楽　三好真亜沙
車輌　山中　同
ロケ地協力　ＮＰＯ法人市民シアター・エフ 深谷シネマ
横浜市神奈川水再生センター
東洋英和女学院大学
居酒屋 てんじんまえ
打木邸
船越邸
キャスト協力　株式会社 舞夢プロ
無名塾
放映新社
ロットスタッフ
トライストーン・エンタテインメント
株式会社 D-dash&Company
エキストラ　栗井泰花　伊藤　洸
今村寿志　遠藤恵里子
尾形卓郎　香川ひかり
岸　櫻子　黒澤怜慈
後藤里見　柴田美波
鈴木健太　鈴木寿人
高橋美帆　土谷紗由理
中城京祐　濱口　暁
松原　光　松本奈菜子
若林大介　脇百合香
矢島　望
深谷シネマ関係者の皆さん
日本映画学校２５期有志の皆さん

『青春懺悔行』

協力　静山壮

『CHAOS*LOUNGE declaration』

協力　mograg garage
ビリケン商会
FORESTLIMIT
CASHI
ラピュタ阿佐ヶ谷
HOTEL ANTEROOM KYOTO
ホテルサンライン蒲田

『関の里 ～子どもたちのこれから～』

企画協力　松林要樹
草津楽泉園とみちのくの子どもをつなぐ会
協力　川島純怜　斎藤みどり
佐藤映治　富永まゆみ
沼田知哉　藤田三四郎
星龍之介
国立療養所 栗生楽泉園
白河スーパーキッズの皆さん
白河丸の内町内会の皆さん

『漁火』

協力　坂巻信子
濱田由美
久家虎一
久家英嗣
山下京子
河野弘光
河野砂有理
河野瑠菜
濱田吉三
濱田順子
濱田輝夫
久岡義人
藤田ヨシエ
冨沢健治
堺目・壱部地区のカクレキリシタンの皆様
社会福祉協議会生月地域福祉センター
生月島の皆様
相州病院
藤が丘病院

卒業制作上映会プレイバック

日本映画学校の卒業制作上映会は、
スペースＦＳ汐留をはじめ、富士フイルムホールやＴＯＫＹＯ ＦＭホールなど、
都内の劇場にて開催してきました。
少しですが、歴代のチラシやパンフレットをまとめました。

日本映画学校の沿革

1975.4 映画監督･今村昌平が「既設のレールを走りたくない若者たち、常識の管理に甘んじたくない若者たちよ集まれ」と呼びかけ、「横浜放送映画専門学院」を横浜駅前に開校。今村昌平 学院長に就任。

今村昌平の理念の根幹となる「農村実習」がこの年スタートし、以来３０年間行われた。

1983 今村昌平監督作品「楢山節考」が第３６回カンヌ国際映画祭パルム･ドール受賞。

1986 川崎市、小田急電鉄、映画会社等の協力により、３年制の専門学校『日本映画学校』が誕生する。国内は基より、世界各国からの留学生を受け入れる。
新百合ヶ丘に移転。今村昌平 理事長･学校長に就任。

1988 東京･新宿「テアトル新宿」にて、第１回新宿映画祭主催、以後８回開催。

1989 日本映画学校･日本ヘラルド映画共同製作作品「バナナシュート裁判」一般公開。

1992 石堂淑朗 学校長に就任。

日本映画学校･日本ヘラルド映画共同製作作品「福本耕平かく走りき」一般公開。

1995 卒業製作作品外部一般公開始まる。

「第１回しんゆり映画祭」開催。日本映画学校全面協力のもと、川崎市民と共に現在も川崎市新百合ヶ丘地域でＫＡＷＡＳＡＫＩしんゆり映画祭として、２０１２年で第１８回を迎える。

ＣＩＬＥＣＴ（国際映画テレビ学校連絡センター）※の正会員となる。
※世界各国の主な映画大学、映像教育機関で組織されている国際交流機関

1996 佐藤忠男 学校長に就任。

1997 今村昌平監督作品「うなぎ」が第５０回カンヌ国際映画祭パルム･ドール受賞。

1999 映像機関誌「日本映画学校だ」創刊。

2000 オーストラリア／リズモア･キャンベラ･シドニーの三都市で、サザンクロス日本映画祭を主催し、本校卒業製作作品等が上映される。

2001 オーストラリア国立サザンクロス大学と教育提携し、編入留学制度がスタートする。

ＰＦＦアワード２０００グランプリを含め４賞を受賞した李相日監督の卒業製作作品「青～chong～」が一般公開。
（２００６年ＤＶＤリリース）

2004 佐藤忠男 理事長･学校長に就任。

2007 佐々木史朗 理事長に就任。

2009 横浜市開港１５０周年記念映画「３つの港の物語」、中国／北京電影学院、韓国フイルムアカデミーと共に、共同製作する。

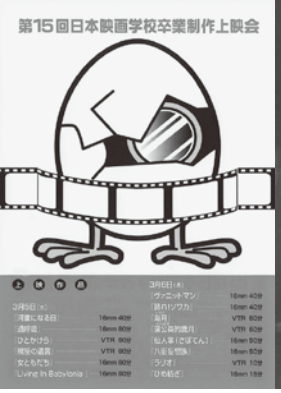
2011 日本映画大学 開学。学長･佐藤忠男。

千葉茂樹 日本映画学校 学校長に就任。

２２期卒業製作作品「おってくらんし」が、ザ･コダック･フィルムスクールコンペティションにおいて、日本初のアジア太平洋地域で優勝。世界トップ４入りを果たす。翌年２月、フランス／クレルモン･フェラン国際短編映画祭公式招待。

2012 俳優科（２５期生）最後の卒業生を送り出す。

2013.3 日本映画学校 閉校。
建学の精神は、日本映画大学に引き継がれる。



日本映画学校卒業製作作品の足跡

○出品･招待　★受賞･表彰

「家族ケチャップ」(1993)
○フランス／クレルモン･フェラン短編映画祭招待
★ぴあフィルムフェスティバル審査員特別賞

「妻はフィリピーナ」(1993)
★東京国際学生映画祭ドキュメンタリー部門グランプリ
★日本映画監督協会新人賞

「one of all」(1995)
★ヒロシマ国際アマチュア映画祭文部大臣奨励賞

「鴉」(1996)
★日映協フィルムフェルティバル学生映画部門グランプリ

「カニタ」(1997)
★ヒロシマ国際アマチュア映画祭審査員特別賞

「ファザーレス―父なき時代」(1997)
★日映協フィルムフェスティバル学生映画部門グランプリ
★ニューヨーク大学国際学生映画祭特別賞
★マンハイム･ハイデルベルグ国際映画祭
　最優秀ドキュメンタリー賞・国際映画批評家連盟賞
★ソフィア国際学生映画祭ソフィア大学ジャーナリズム学科賞

「はい毎度！A Korean I met Japan」(1998)
★韓日金冠青少年映画祭審査員特別賞

「青 ～chong～」(1999)
★ぴあフィルムフェスティバルＰＦＦアワード
　グランプリ･企画賞･エンターテイメント賞･音楽賞

「ブリキの鼓動」(1999)
★韓日青少年映画祭グランプリ
★インディーズムービー･フェスティバルファンタジー賞

「あんにょんキムチ」(1999)
★山形国際ドキュメンタリー映画祭
　アジア千波万波特別賞･ＮＥＴＰＡＣ特別賞
★韓日青少年映画祭監督賞
★文化庁優秀映画賞短編映画部門優秀映画賞

「掌の上(青の瞬間)」(1999)
★神奈川映像コンクール最優秀作品賞

「バンザイ人生まっ赤っ赤」(2000)
★ＴＡＭＡ映画フォーラムコンペディショングランプリ

「トシ君が生まれた日」(2001)
○第 54 回カンヌ国際映画祭学生部門出品
★ハワイ映画祭ＮＥＴＰＡＣ特別賞

「home」(2001)
★国際学生映画祭グランプリ
★ＴＡＭＡ映画フォーラムコンペディショングランプリ
★ＡＩＦＦアワードグランプリ
★神奈川映像コンクール優秀作品賞
★イメージフォーラム奨励賞

「レンニュウ」(2002)
★日本映画テレビ技術協会そつせい祭グランプリ

「Living in Babylonia」(2003)
★日本映画テレビ技術協会そつせい祭優秀作品賞
★ＪＰＰＡアウォード学生部門
　エディティングカテゴリー｜ゴールド賞
★横濱学生映画祭学生部門俳優賞

「蒲公英的歳月」(2003)
★秋田十文字映画祭北の十文字賞

「熊笹の遺言」(2003)
★秋田十文字映画祭北の十文字賞･観客賞
★Az contests 準グランプリ･観客賞
★横濱学生映画祭学生部門グランプリ
★ＪＰＡＡアウォード学生部門エディティングカテゴリーⅡゴールド賞
★日本映画復興会議奨励賞
★おおさかシネマフェスティヴァルベストテン日本映画部門自主制作賞

「回転する空の下で」(2004)
★日本映画テレビ技術協会そつせい祭グランプリ
★ＪＰＰＡアウォード学生部門ミキシングカテゴリー｜ゴールド賞

「非常ベル」(2004)
★ＪＰＰＡアウォード学生部門エディティングカテゴリー｜ゴールド賞
★フィルムラバーズフェスタグランプリ

「歩くチカラ」(2004)
★韓国国際青年映画祭グランプリ
★CINE VIS CINEMA 2004 BB 選定優秀配信作品

「私をみつめて」(2004)
★かわさきデジタルショートフィルムフェスティバルグランプリ

「夏のおとどけもの」(2005)
★ＪＰＡＡアウォード学生部門エディティングカテゴリー｜ゴールド賞
★韓国国際青年映画祭グランプリ

「イン･ジャパン」(2005)
★ＪＰＡＡアウォード学生部門ミキシングカテゴリー｜ゴールド賞

「僕達はくり返していく」(2005)
★かわさきデジタルショートフィルムフェスティバルグランプリ
★宝塚映画祭映像コンクール準グランプリ

「everything」(2006)
★フィルムラバーズフェスタグランプリ
★日本映画テレビ技術協会そつせい祭優秀作品賞
★山形国際ムービーフェスティバルＧｙａｏ賞

「風にのせて」(2007)
★ＪＰＰＡウォード学生部門エディティングカテゴリー｜ゴールド賞

「保健」(2007)
★日本映画テレビ技術協会そつせい祭グランプリ

「キャラメルドロップ」(2007)
★フィルムラバーズフェスタグランプリ

「炎」(2008)
★日本映画テレビ技術協会そつせい祭優秀作品賞

「八月の軽い豚」(2008)
★フィルムラバーズフェスタグランプリ

「月のかげ」(2008)
★京都国際学生映画祭観客賞

「魚の味」(2009)
★日本映画テレビ技術協会そつせい祭技術奨励賞

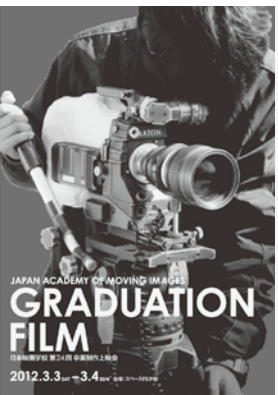
「おってくらんし」(2010)
○フランス／クレルモン･フェラン国際短編映画祭公式招待
★ザ･コダック･フイルムスクール･コンペティション
　アジア太平洋地域優勝(日本初)
★日本映画テレビ技術協会そつせい祭グランプリ
★映文連アワード２０１０ パーソナル･コミュニケーション部門優秀賞
★京都国際学生映画祭 審査員特別賞

「遠影」(2010)
★フィルムラバーズフェスタグランプリ

「北風」(2012)
★日本映画テレビ技術協会そつせい祭技術奨励賞

「Ｖｏｙ！ ～ある選手たちの戦い～」(2012)
★映文連アワード２０１２ コーポレート･コミュニケーション部門優秀賞

受賞や大きな映画祭への出品･招待を中心にまとめました。
例年、本校の卒業制作作品は様々な映画祭へ出品されており、
こちらのリストは一部に過ぎません。



日本映画学校は
映画監督･今村昌平が創立した
映画を学ぶ学校です。
創立以来、映画製作現場や映画産業に
多くの卒業生を送り出してきました。
今春、閉校する日本映画学校は
日本映画大学へ建学の精神が引き継がれます。
長らくのご愛顧、ありがとうございました。

発行日　2013 年 3 月 2 日

編集人　芦澤浩明

発行　日本映画学校
〒215-0004 神奈川県川崎市麻生区万福寺 1-16-30
TEL:044-951-2511 ／ FAX:044-951-2681

印刷･製本　株式会社 曽根印刷
http://soneprinting.web.fc2.com

デザイン･Web･動画制作　曽根大樹（曽根印刷）
http://daiko.tabigeinin.com

Copyright © 2013 Japan Academy of Moving Images. All Rights Reserved.

理念

日本映画学校は、
人間の尊厳、公平、自由と個性を尊重する。
個々の人間に相対し、
人間とはかくも汚濁にまみれているものか、
人間とはかくもピュアなるものか、
何とうさんくさいものか、
何と助平なものか、何と優しいものか、
何と弱々しいものか、
人間とは何と滑稽なものかを真剣に問い、
総じて人間とは何と面白いものかを知って欲しい。
そしてこれを問う己は一体何なのかと反問して欲しい。
個々の人間観察をなし遂げる為にこの学校はある。

学校法人神奈川映像学園・日本映画学校
創始者　今村昌平